

スキー発展の功労者

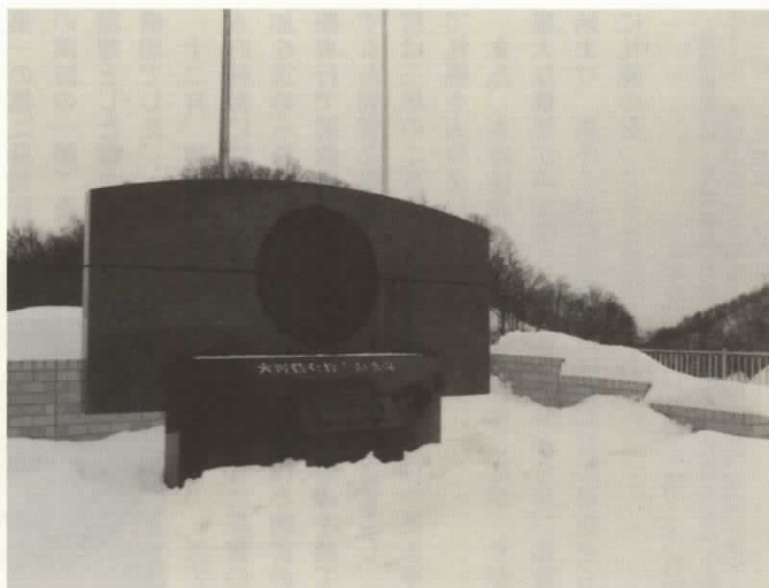
## 大野精七

多くの人が楽しんでいる冬のスポーツ、スキー。このスキーの発展に大きな役割を果たした大野精七を紹介します。

大倉山のジャンプ台のふもとに、飛び立つ選手を見守るように建っている「大野精七博士顕彰碑」。これは、彼が医学界とスキー界の発展に大きく寄与した功績をたたえて昭和五十七年に建立されました。それは彼が九十七歳で生涯を終えた年でした。

大野は明治十八年（一八八五年）茨城県に生まれ、東京帝国大学医科大学を卒業。大正十年（一九二一年）に北海道帝国大学に招かれ、この時、「北海道へ行く以上生涯をこの地にうずめよう」と覚悟しました。また、「冬の生活には、寒さと雪を克服する体力が必要なので、雪に親しもう」と考え、さっそくスキーを始めたそうです。

十三年（一九二四年）に北大医学部産婦人科主任教授となり、北大スキー部第五代部長にも就任。一



大倉山ジャンプ競技場に建立している大野精七博士顕彰碑

般に普及していなかったスキーを広めるため、彼は手稲山に日本最初のスキー小屋「パラダイス・ヒュッテ」を建設しました。このスイス式の小屋は全国

のスキーヤーのせん望の的でした。

昭和三年には北大スキー部が大活躍。第二回アイスオリンピック冬季大会へ初めて選手を派遣したほ



中島公園の「冬のスポーツ博物館」にある大野清七コレクション  
(平成9年撮影)

か、全日本学生スキー大会でもジャンプ、複合競技で上位を占めて優勝。また、故秩父宮が来道してスキーを楽しまれた時、警護と案内を任せられました。秩父宮は、大野らに「冬季オリンピックは札幌で開くべきで、それには大型ジャンプ台が必要」と話され、これをきっかけに五年から、宮様スキー大会が開催。大倉山にジャンプ台が完成しました。

十一年から全日本スキー連盟の副会長として活動した結果、翌年、ついに第五回冬季オリンピック大会は札幌と決定。ところが、翌年日中戦争が泥沼化し、結局、大会は返上してしまいます。しかし、当時大野が熱心な活動をしていたからこそ、四十七年の札幌オリンピック大会は実現したのです。大野は子宮がんの研究などで国際的に知られ、産婦人科学の発達に貢献しました。また、札幌医科大学の初代学長になるなど医学界をリードしました。彼が寸暇を惜しんでスキーの普及に情熱をかけたのも、「立派な子どもを産んでもらい、市民に冬を健康で明るく過ごしてほしい」という医学者としての願いがあったからでした。

(平成九年三月号・第三十七回)